



わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞ホームページ <http://www.akai-shinbun.net> <発行所>あかい新聞店 武蔵野/知多郡武蔵町字金下37番地 ☎0569-72-0356 常滑市/常滑市市場町4丁目167番地 ☎0569-35-2861

各種地図調整・印刷・地理情報システム
立体地図・地図模型・地図パネル・地図掛け軸
オンデマンドデジタル印刷・大判ポスター出力

株式会社 アルファ出版
〒461-0004 名古屋市中区葵一丁目15番18号
オフィスカンナゴヤ 6F
TEL 052-931-1009 FAX 052-932-1312
<http://www.alpspublishing.co.jp/>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』就職 —自分ドラマつくろう— (130) 岡田清治



■プロフィール

著者：岡田 清治 (おかだ・せいじ)

1942年生まれ ジャーナリスト(編集プロダクション・NET108代表)

著書に『高野山開創千二百年 いっぱいさん行状記』『心の道言』

『あなたは社員の全能力を引き出せますか?』『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を下記のFAXかメールでお寄せください。
今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込む
ことを試み、一緒に考えます。
FAX: 0569-34-7971 メール: takamitsu@akai-shinbun.net



【写真】空を昇り上げると戦争が騒がしく思えた(著者撮影)

ドラマは続く

そのうち生駒山で折り返した飛行機編隊の数が増し爆撃が激しくなった。シシルシュという音を発しながら焼夷弾が落ちてきた。齊造が倉庫の中で消防用具を捜している。天井のワンドスという音が聞こえる。不発弾が雨の土のうたのそいでいるではないか。驚いている。雨が降るような音が聞こえてくる。周りが火の海である。齊造は倉庫を飛び出し、空を走り、文字通り火の海に落ちて死体をあちこちに浮かべている。まさに地獄である。

連隊も度々大空襲で食料が事欠くようになってきた。幸い部隊兵舎や近くにある府立体育館、大阪府庁の建物は爆撃を受けていない。六月のある日、経理室の大尉の高城主計に呼ばれた。「片桐、君は千早村の出身だが、炭焼きができるか」

「できます」
千早村は炭焼きが盛んであるが、齊造は経験してはなかった。しかし、一連の空襲で身の危険を感じていたため、炭焼きの仕事なら山の奥に入れば少しは安全だろうと判断した。

連隊の中に炭焼き部隊、漁業部隊、農業部隊ができた。食料と燃料の確保が任務である。炭焼き部隊は二十人で構成され、真面の滝の奥にある雑木山に配備となった。齊造はそこで炊事係上等候として食事をこつて役を命じられた。一ヶ月後、初めてできた木炭を班長と兵士連隊に運び代わりに味噌、魚などを部隊に持ち帰った。

炭焼き部隊は真面の滝の旅館を兵舎にした。大阪二田が焼野原だったが(それでも必勝信念)で勝つ信じていた。日本には旗幟大義を擁する連合艦隊があるから敗けることはない、と確信を持っていたのだ。東郷平八郎がバルチック艦隊を撃破したことがいつも頭を浮かんできた。過去の勝利に酔いしれてはかきいり、いつかは破綻を招く。これは戦争だけではあるまい。企業も個人にも言えることだ。

マスコミからは勝利のニュースしか入らない。飯に敗れろと思っても、そういうことを語れば射殺を覚悟しなければならぬ時代であった。八月の新聞に「国体維持が命題」とあり、記事の変化に齊造は気づいた。日本はボツダム宣言を拒否したため、米軍は八月六日に入道史上初めて広島に原爆を投下。さらに三日後、長崎にも落とした。日本は無条件降伏は受け入れられない、というのが先の言拒否の理由だが、その決断はあまりにも大きな過ちを犯し、日本外交の貧弱をみせた。

「おーい、天皇自ら詔勅を放送されるぞ」
旅館で朝食後、新聞を読んでいた仲間の人がかんた。
「フオオの雑音がひびくよく聞き取れないがど

うやら日本が戦争に敗れたらしい。天皇は「世界の進軍に遅れを感ずることを期せよ」といわれた最後の言葉だけを齊造は聞きこもはる記憶として、玉音放送が終わると、炭焼き部隊は旅館の庭で号泣した。

敗戦時代が変わる。戦時中、幹部候補生の試験に落ちた。一生、二等兵で終わる。暗澹たる気持ちで毎日をを送っていた。(その時々は精一杯、生きていくとチャースは巡つてくるものだと齊造は戦争で大切なことを学んだ。失敗したと悲観になり、時には投げやりになる。そこで踏ん張るかどうかで、次の進路はきこく変わる。

どんな状態に置かれてもチヤースになるが、ネクラになるか。後の人生が変わる。物事は明と暗、前進と後退がある。見方によつては明らかで、失敗は失敗である。中途中、何回も失敗したり、危機に直面している人々も少なくない。時には、失敗をバネにして危機に向かう人々も出ていく。とはいっても、失敗が重なる人々も出ていく。危機を回避したくなる。一度や二度こそと思ふときは決断してつかり魂を燃焼させた方がいい。齊造はリュウクサック背負って千早村へ帰る道中、そんな思いを巡らしていた。齊造は復員してしばらく家でぶらぶらしていた。進駐軍を怖れた親類の人も千早村片桐家に身を寄せた。

十日ほど経ったころ、神戸製鋼所の本社のある神戸市に復職の相談に出かけた。兵役三年の間、同社から入営中の留守宅に毎月の月給三八円を送ってもらっていたからだ。

「もう、お前はクビだ」
事務所で告された。工場内に機械設備が並んでいたが、すべて賠償で中国についでいられるという。工場で働いている社員に辞表を出し合っていることを知らせる。現つてくる者は所帯持ちの社員ばかりで、独身者はすでに辞めている。三年分の退職金八百円を手にして神戸を離れた。

「こまめ読んで、真三は服したいと思つて、たこころ、うの子がお盆にお茶を入れて部屋に入つた。マジタミグ」
「そうでしたか」
「どうでも、うの子、パーキンソン病知つて、い」
「聞いたことはありますが、詳しくは知りません。どうかしたのですか」
「友人的かみさんが、どうもパーキンソンではないのかと、次のようなメールを送つてきたのだ」

ある日、後期高齢者の身内が小指の小刻みで擦えに静かに恐怖を感じていた。そのうち靴を履くように歩いているのに気づいた。急に病が襲つてきた。これも老化が原因だろうと自分を納得させて、ついには意を決して近くの病院を訪ねた。

脳神経内科の医師に診察してもらい、MRIで脳の画像を撮られた。脳画像を見ながら医師は「脳梗塞でない。……と次から次へと病名を上げながら消去法していくとパーキンソン病と診断された」と告げた。

診断しなくても治療の決手が無いと教えられた。国立病院機構仙台西多賀病院院長武田氏監修のパンフによると、パーキンソン病は神経伝達物質のドーパミンの量が減少して脳の指令が上手く伝わらなくなるものだ。重症度は1度から5度(重症)に分かれ、重症になる車椅子の生活になる。

パーキンソン病の症状はゆっくり進行。初期段階では日常生活にはほとんど支障がないという。やはり医師に相談しながら適切な薬物療法ですが、病気がどうも付き合うことだとして、新型コゴ以外には病変は隠いかな。運動をするのも役立つ。高齡化とともに、歩行難などパーキンソン病に似た症状が見られるように思われる。そんな矢先、夜、クルマから降りるとき、溝に足をとられ顔と脇腹に打撲傷を受けたパーキンソン病の患者に突かれた。友人から「パーキンソン病は頭のいい人がなるのよ」という慰めの言葉に友人の妻は泣き止んだ。う「結局、脳神経に關係した病気ですね」

「それは高齡化するものについでしようね」
「ではまた、読書に戻るよ」
「わかりました」

三井、住友、三菱の財閥企業が潰れているんだから神戸製鋼所がダメになるのも当然だと齊造は自分に言い聞かせた。大学出、いつてもなんの役に立たない。五高から九大法学部に進んだ四男の信哉も、ヤミ屋が儲ける時代に勉強なんかしてしんどく、千早村に戻つてしまった。

長男の忠信は陸軍技術中尉で伊丹空港近くの兵器補給所に戻り、自動車隊の隊長を任じられていた。物資を輸送する輸車隊、馬力隊、陸歩隊、自動車隊があった。自動車はトラックで、いまでも自動車の運転手はくらでもいるが、戦時中は少なく、伊丹の自動車隊では運転手を養成して南方に派遣していた。

敗戦になり軍は解散したが、人は兵舎に残った。忠信は忠告を愛国を誓つたで家には戻れないという。

